

薩藩農村人口の動態的研究 (第1報)

資 料 篇 1

羽 生 純 夫

Sumio, HABU.

序

旧藩時代の人口動態の研究資料として、竿次帖、名寄帖、宗門手札改帖などは最も貴重なものであるが、大方、散逸しており、或いはあつても、虫蝕いや破損のため判読に困難なものが少ない現状である。そこで、できるだけ、これらの資料を広く採録して、当時の人口動態、即ち、人口の推移、年令構成、配偶関係、出生、死亡、移動などの事実を明らかにし、ひいては、自然的、社会的条件が人口現象に如何なる影響を及ぼしたかを考察するのが本論の目的である。

1. 山 崎

I 資 料 の 出 所

本資料は、専ら、旧山崎町役場、現宮之城町役場山崎支所に保存されている仮屋文書中、宗門改関係の記録によつた。元禄3年以降、大きな空白がなく、また、破損、虫蝕いの少ないこと、併せて、県下唯一のものと思われる。

註 引用記録は、都合によつて第3報末尾に記す。

II 統 計 資 料

第1表 山 崎 郷 人 口 推 移 (1690~1859)

村	年次	元禄3	宝永2	享保6	享保20?	元文2	宝暦11	天明6	寛政12	文化12	文政7	弘化2	安政6
		(1690)	(1705)	(1721)	(1735)	(1737)	(1761)	(1786)	(1800)	(1815)	(1824)	(1845)	(1859)
郷 山 久 二 白 泊	士	—	—	244	—	—	—	456	—	515	—	522	—
	崎	—	—	231	258	—	—	—	—	—	—	528	555
	富	—	—	400	438	—	—	—	—	—	—	785	783
	木	—	214	245	255	281	398	1,256	587	644	682	728	742
	渡	—	302	367	423	—	—		622	677	686	730	715
	川	288	77	—	100	—	—		222	199	185	181	176
	野	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計		—	—	—	1,463	—	—	—	—	3,355	—	3,601	—
(在郷計)		—	1,167	—	—	—	—	—	—	—	—	2,951	2,971

註 1. 山崎郷の総人口は、郷士及び在郷の他、郷士下人、野町、中宿を合したものであるが、これらの数は非常に少ない。

註 2. 宝永2年の在郷計は野町を含めている。従つて、山崎、久富木の人口は530位である。

註 3. 享保20年? は表紙なく、前後の関係からの推定である。

第2表 年令階級別人口百分比

年次 年令階級	1690	1705	1721	1761	1786	1800	1831	1852	1859
村名	白, 泊	白, 泊	山, 久	二	二	白	山	山	白, 泊
1~5	10.3	9.6	11.2	14.9	10.9	8.7	8.2	7.7	5.5
6~10	8.9	8.8	8.8	11.9	10.7	7.4	8.5	9.8	10.4
11~15	9.8	7.9	9.2	10.6	11.1	10.0	7.0	10.7	13.6
16~20	10.3	9.2	8.8	7.2	9.1	9.5	6.6	6.8	6.2
21~25	8.3	8.4	7.7	5.9	13.4	11.0	8.0	10.9	8.4
26~30	8.0	9.2	9.2	5.2	8.6	7.9	9.5	7.9	9.7
31~35	6.9	9.2	8.5	8.3	8.2	6.1	10.1	6.0	5.9
36~40	4.3	6.7	6.3	5.9	5.6	6.3	7.2	5.4	4.9
41~45	7.8	7.1	4.6	5.9	4.5	7.9	7.0	6.4	9.1
46~50	5.7	4.2	5.9	3.9	2.5	6.0	5.3	7.3	4.8
51~55	4.3	3.3	6.4	3.6	3.7	5.8	4.6	5.8	6.2
56~60	4.0	5.9	3.9	3.6	4.7	3.9	4.4	5.3	4.6
61~65	4.3	4.6	3.3	3.4	2.7	3.9	5.1	4.3	4.8
66~70	2.6	2.9	2.4	2.8	3.5	3.1	3.8	2.4	2.2
71~	4.0	2.9	3.7	4.1	2.7	4.0	4.7	3.4	3.9
総 数	348 (349)	239 (250)	543 (570)	387 (392)	514 (533)	618 (620)	527 (542)	533 (534)	693 (711)

註 1. 白は白男川村, 泊は泊野村の略, 以下同じ。

註 2. 総数の括弧内は年令, 及び性の判読不能なものを含む。第1表と総数が符合しないものがあるが破損がひどかつたか, 著者の記入洩れのためである。

第3表 性 比 の 推 移 (人口100中男)

年 次	性 比	村 名	年 次	性 比	村 名
1690	62.9(58.1~67.4)	白, 泊	1800	52.8(48.0~54.1)	二, 白, 泊
1705	59.2(54.4~62.1)	二, 泊, 白	1824	51.9(48.8~54.9)	二, 白, 泊
1721	56.9(53.9~59.9)	山, 久, 白, 泊	1845	53.4(51.6~55.4)	山 崎 全 郷
1735	55.6(53.4~57.2)	山 崎 在 郷	1859	53.6(51.7~55.4)	〃
1737	56.9(51.2~62.4)	二			
1761	51.5(46.5~56.4)	二,	1690~1737	57.4 ± 0.86	
1786	52.4(49.3~50.7)	二, 白, 泊	1761~1859	52.9 ± 0.48	

註 1. 括弧内は10%の危険度における信頼限界を示す。以下, すべて之に倣う。

第4表 年令階級別有配偶率

年次 年令階級	1690 ~ 1761		1786 ~ 1800		1831 ~ 1859	
性別	男	女	男	女	男	女
16 ~ 20	—	43.3	—	14.3	—	17.4
21 ~ 25	24.6	78.9	10.9	56.6	7.4	51.6
26 ~ 30	53.1	93.9	51.2	72.0	36.5	53.7
31 ~ 35	70.1	93.0	69.8	73.0	45.6	79.3
36 ~ 40	63.8	91.5	75.9	77.4	70.2	75.0
41 ~ 45	81.7	78.1	61.5	66.7	64.9	75.0
46 ~ 50	70.0	77.8	78.1	89.3	71.7	70.2
51 ~ 55	65.8	76.5	76.7	76.0	73.6	60.0
56 ~ 60	70.0	87.0	76.9	54.5	64.3	73.2
61 ~ 65	59.4	60.0	80.0	35.3	72.0	51.5
66 ~ 70	56.5	41.2	44.4	26.3	63.0	47.6
71 ~	57.6	21.7	52.4	26.3	56.3	13.4
配 偶 数	329	329	219	219	333	333

第5表 平均生子、及び死人率の推移

年次	平均生子率	有配偶率	平均死人率	平均人口
1682~1690	25.3	168.8(15.2)	19.9	343(52)
1699~1705	28.2	158.3(16.0)	16.7	1,129(38)
1714~1721	24.2	149.3(16.8)	12.3	1,434(86)
1721~1729	30.3	—	12.1	268
1727~1735	26.7	—	13.5	1,416
1729~1737	24.7	—	13.5	269
1753~1761	26.1	174.2(16.8)	16.2	1,300(92)
1772~1786	22.0	160.5(14.4)	17.1	1,780(173)
1786~1800	20.2	107.9(15.1)	11.2	1,344(142)
1800~1815	19.8	—	15.8	3,355
1815~1819	17.0	—	17.9	3,351
1819~1824	20.4	—	—	1,553
1824~1831	18.3	132.1(15.7)	—	542(79)
1831~1838	21.2	—	—	1,413
1838~1847	21.2	156.6(13.7)	14.2	3,519(80)
1845~1852	20.8	—	—	3,638
1852~1859	18.3	163.3(11.8)	—	1,348(96)

註. 平均生子率と、有配偶生子率の算出に用いた記録は、異なる場合が多い。後者の括弧内は、16~50の女の有配偶であり、平均人口の括弧内は、これの算出に用いた配偶数である。平均生子率、有配偶生子率、平均生子率の関係を見るために記す。

(イ)

年次 階級	1690~1761	1815~1859
1 ~ 20	39.8 (38.0~41.7)	34.2 (32.6~37.1)
21 ~ 40	30.0 (27.7~32.3)	30.9 (29.3~32.5)
41 ~ 60	20.0 (18.2~21.8)	23.5 (21.4~26.2)
61 ~	10.1 (8.7~11.9)	11.4 (10.2~13.7)
1 ~ 40	69.8 (67.4~72.3)	65.1 (62.9~67.1)
41 ~	30.2	34.9

(ロ)

年令階級	性別	1690~1761	1815~1859
1~40	男	68.1(65.3~70.6)	65.7(62.9~68.4)
	女	72.0(67.1~76.0)	64.2(61.4~67.0)
41~	男	31.9(29.4~34.8)	34.3(31.6~36.1)
	女	28.0(24.0~31.9)	35.8(33.0~38.6)

(ハ)

年次 階級	1690~1761	1786~1859
1 ~ 20	58.2(53.4~63.0)	56.2(52.5~59.8)
21 ~ 40	56.0(50.3~61.5)	54.4(50.7~58.0)
41 ~ 60	64.0(59.2~79.6)	53.1(48.5~59.2)
61 ~	60.5(51.7~68.4)	54.2(47.5~59.1)
1 ~ 40	57.3(54.2~60.2)	55.4(53.4~57.4)
41 ~	62.9(58.1~68.0)	53.7(50.0~57.4)
計	59.0(57.1~60.8)	54.8(52.9~56.8)

Ⅲ 動態大要

本篇は、専ら、資料整理に重点をおくものであるが、将来の研究の方向づけのため若干の分析、考察を試みることにする。

1. 人口の推移

第1表で見るように、元禄、宝永の頃から寛政の頃まで、約100年間に人口は倍加している。しかも、二渡村の例で示されているように、その間に増加の中断がないように思われる。これは、明治以降の吾が国の人口増加に、ほぼ匹敵している。

また、一般に徳川時代の人口は、享保頃までに倍加し、その後、停滞期に入るといわれるが、こゝでは明らかに寛政の頃まで増加を続けている。しかし、宝暦から寛政まで、その速度が鈍ったことは、第2表及び第5表からも容易にうかがわれる。

その後、約70年間は完全に停滞人口の様相を呈している。

2. 年令構成

人口増加の速度の差にしたがつて、宝暦前と天明以降を比較すると、前者の人口ピラミッドは三角形をなすが、後者は釣鐘状をなし、年令構成の老令化を示している。

更に両者の相違が統計的に有意性を有するが否かを検討して表(イ)の結果を得た。

即ち、後者では41~の割合が有意の差で増えている。

更に、性別には表(ロ)の結果を示す。

封鎖人口での老令化は、出生減退に基くことは云うまでもない。しかし、こゝで41~の女の割合が有意の差で増加している。これと老令化との関係は更に検討を要する。次に、年令構成

で明らかに凶年とか、飢饉によると思われる様相を示すものがあるが、この点は他の地方と一括して追及することとする。

3. ~~性前年率構成比~~ 年令階級別性比

第3表に見るように、女に比べて男が多いのは徳川時代を通じての特徴である。しかし、年次が下るにしたがつてその差は縮小してくる。また、元文、宝暦の間に断層を認めるから1690~1761, 1786~1859の二群にわけて年令階級別に性比を求めると前頁表(ハ)の結果を示す。

以上の結果は次のように要約できる。

a. 両者とも、年令階級間に有意の差を認めない。しかし、前者で21~40, 41~60とは殆んど有意に近い差を示す。

b. 両者間では41~60, 41~で有意の差を認める。

現在では、年令が上昇するに従つて性差は縮小し20前後からは却つて女が多くなるのが普通である。しかるに、1690~1761では逆に拡大する傾向にあり、1786~1859では僅かに縮小するようにもあるが、まず変らないと見てよい。

このことは年代が下るにつれての性差の縮小過程が出生時の淘汰(所謂、間引き)に当つての性的差別の変化に基くものでなく、却つて、41~の女が男に比べて延命上有利になつたことを示すものと思われる。^{註1,2}

註 1. 性差の縮小の説明として前者では、労働力の関係から女を多く間引き、後者では、人口増加を恐れるのあまり、差別なしに間引いたと考へると都合がよいが、こゝではその説明は成りたない。

註 2. 前項、人口の老令化で、41~の女が有意の差で増加したことも、これを証明するように思はれる。とすれば1690~1761では年令上昇とともに性差が拡大しておることから老令になるにしたがつて(特に41~60)女がより多く死亡したと考へることも可能である。

4. 配 偶 関 係

配偶関係を、人口構成の差にしたがつて、1690~1761, 1786~1800, 1832~1859の時期にわけて比較し次の結果を得た。

女

年 次 階 級	1690~1761	1786~1800	1832~1859
16 ~ 50	78.9(74.3~82.5)	60.9(55.0~66.0)	60.3(54.8~64.4)
16 ~ 30	70.5(64.3~76.1)	48.0(40.9~55.3)	44.3(38.1~51.5)
31 ~ 50	87.9(82.7~91.7)	76.0(68.5~81.7)	75.1(69.3~80.1)
51 ~	59.8(52.2~67.3)	—	46.1(43.7~56.3)

男

21 ~ 50	64.0(61.0~67.3)	略	50.4(46.3~54.1)
21 ~ 30	41.3(33.7~48.6)		20.5(19.4~31.2)
31 ~ 50	71.9(65.7~77.6)		62.3(56.6~62.2)
51 ~	62.6(55.8~69.6)		59.2(44.0~65.1)

即ち、後期は、前期に比べて配偶率は明らかに低下している。しかも結婚年令の上昇だけによる

ものでないことは、31~50で男、女ともに有意の差で減少していることから断言できる。これによつて、後期は、結婚も満足にできないような農民階層が増えたこと、即ち、結婚生活を困難にするような社会状態にあつたと推察出来よう。このことが出生に影響を与えることはいうまでもない。

5. 出生、死亡

宗門改帖には、前回の改め以降出生したものを「生子」としてあげ、且つ、集計している。しかし、その届出が正確でなかつたらしいことが、各才別の年令構成からうかがわれ、また、その間、死亡したものは出生にはいないから、生子数をそのまま出生数として採用することはできない。たゞ、その正確性が、各時代を通じて変らなかつたとの仮定のもとに、比較が可能である。生子数をその間の平均人口で割つたものを、出生率と區別する意味で平均生子率と名付けた。実際の出生率がこれより上廻ることはいうまでもない。また、16~50の有配偶婦人数で生子数を割つたものを、有配偶生子率と呼ぶことにする。

死亡についても、同様で、乳幼児の死亡は大部分が計上されていないものと思われる。同じ操作で平均死人率を計算した。

第5表で見るように、後期は明らかに生子率の減少、死人率の上昇がある。

年次	1690~1761	1800~1859
生子率平均	26.5 ± 1.98	19.6 ± 1.46
平均生子率	26.2 ± 0.13	20.1 ± 0.06
有配偶生子率	158	140
死人率平均	14.9 ± 2.13	16.3 ± 1.50
平均死人率	14.6 ± 0.07	16.1 ± 0.06

註. 有配偶生子率は、平均有配偶率及び、平均生子率から算出したもので、概数である。

更に、これを整理して、左の結果を得た。

これによつて、生子率と死人率の差が1690~1761では、約10、1800~1859では4であることを知る。^{註1}

平均生子率の低下は約23%で、有配偶生子率のそれは約11%である。若し、有配偶生子率の低下がなかつたと仮定すれば、1800~1859の平均生子率は22.4となる。しかし、後者では若年令層の有偶率の減少が著明であるから、年令

階級別の計算が可能であるとしたら、まだ下廻る数値が出るはずである。即ち、極く大雑把な云い方をすれば、後者の生子率低下の2/3は有配偶率の低下によるもので、あとの1/3が乳幼児死亡、陰殺などの増加によるものと考えることができる。陰殺の増加よりも、配偶率の悪化が大きな比重を占めている点を重要視すべきである。^{註2}

死人率は、年次によつて変動が大きい。12~13が平常時、16~18は凶年、飢饉のものではないかと想像せられる。更に検討を続けたい。

註 1. 19世紀中に、人口が倍加した、ヨーロッパ諸国の当時の自然増、及び明治以降の、わが国のそれが約10であり、人口停滞期に当る、第一次欧州大戦後のヨーロッパ諸国の自然増が3~5であつたことを考へると、生子率と死人率の差が、出生率と死亡率の差、即ち自然増(減)にほぼ等しいことが考へられる。このことは生子率と死人率に或る一定数を加えたものが当時の出生率、死亡率となることを予想せしめるもので、その推定の可能なことを示している。

註 2. 1786~1859に有配偶生子率がさほど、減少していないだろうことは、第5表、有配偶生子率から推定できる。

6. 人 口 移 動

当時の人口が封鎖人口と考えてほゞまちがいないことは、その社会組織からみて当然である。宗門改帖には他所出、他所入の数を示すことによつて、郷内外の人口移動を記している。これによれば、女の結婚によるものが大部分で、男では下人の移動や、移り百姓が稀に見られる程度である。
